

下笠居

しっとんな!

ええとこやで!



勝賀山中腹より 正月に昇る初日の出



下笠居地区コミュニティ協議会

〒761-8002 高松市生島町353-1 TEL 087-882-0856

6 宮の浦

豊前宇佐八幡宮のご神体が最初に上陸した浜とされる。宮の浦の名称はそのことから来ている。伝承地である宮の浦は現在の生島の海岸線よりも200mほど南の水田地帯。県道の南、宮池の北西に位置し、近くに西生島の薬師堂(タマヨケ地蔵)がある。かつては、この地まで浦(入り海)であった。香西宇佐八幡宮例大祭の元船・小船は宮の浦に着いた御座船を形どったものと伝わる。



7 住吉神社

香西資村(すけむら)の創建と伝わる。(香西氏)讃岐豪族承久の乱(承久3年・1221)に鎌倉幕府に加わって戦功をあげた新居資村(すけむら)が、新たに領地を得た笠居郷に入り、嘉祿元年(1225)勝賀城、佐料城を築城して香西資村と名乗り香西氏を立てたという。



8 一之瀬神社



中山町桑崎池の下に祀られている下笠居で最も早く勧請された神社。伝承によれば天長9年(832)、円珍(智証大師、814~891)が根香寺の鎮守として刻んだ一之瀬明神を本尊として建立した。豊かな社叢は昭和46年(1971)4月、県天然記念物に指定。アラカシ、バウチノ木、ムクロジ、エノキ、クスノキなどが茂る。

9 若宮神社

弾正原の明神と呼ばれ、祭神は大雀神(オオササギノカミ)明治2年(1869)、弾正原の明神に二條院讃岐を祭る小祠と大岩を宮池から遷して合祠した。若宮神社と呼ばれたのは、この合祠以後であるという。



二條院讃岐の祠

10 加茂神社



亀水の加茂大明神。祭神は別雷神(ワケイカツチノカミ)。もと下笠居村の村社。現在は亀水4地区(地下弓弦羽・塩家小坂)の氏神。建仁4年(1204)、福家の城主新居藤大夫資幸(茂幸だともいう)が京都下賀茂神社の祭神を勧請して創建したと伝わる。京都下賀茂神社の末社。

笠居郷の移り変わり

カサオリ(加佐乎利)山を取り巻く位置にある南・東・北・北西をカサオリ郷と表記され、奈良時代からの地名。いつのまにか加佐(カサ)⇒笠、オリ(乎利)⇒居、となつて笠居郷と呼ばれ、江戸時代には笠居村となり明治22年、上笠居村(鬼無)、中笠居村(香西)、下笠居村の三村に分かれる。昭和31年9月、高松市に合併して現在に至る。下笠居地区においては下笠居という歴史的名称を校区名、公共施設名、地元企業名などに積極的に残した。笠居山から勝賀山に呼名が変わったのは香西氏以降であるという。

国立公園の中に国指定史跡

讃岐遍路道-根香寺道-



讃岐遍路道-根香寺道-は歴史的な面影を色濃く残し歴史的価値が十分あることから平成25年10月17日に国の史跡(赤線箇所)に指定されました。

11 生島番屋が浜

東生島の墓地(童子が浜)のやや西の一角の海浜を生島番屋が浜と呼ばれていた。かつて生島港の番屋が置かれていた浜。



昭和25年頃の番屋が浜



現在

12 香西佳清の墓

香西氏18代を継いだ幼小の佳清(よききよ)は、不運にも摂津福島の戦場で痘瘡(天然痘)に罹り視力を失った。一族の内紛が相次ぐなか長宗我部の侵攻を受けて和睦し、長宗我部傘下の一員として秀吉軍との戦闘を余儀なくされ、天正13年(1585)、圧倒的な秀吉軍の攻撃に長宗我部が屈し、香西氏もまた佳清が戦うことなく野に下って360余年の香西氏の歴史を終えた。



場所
川窪西自治会地区内

13 三十一人墓(さんじゅういちにんばか)

山荒地区墓地に三十一人墓と呼ばれる古い墓碑がある。天正13年(1585)5月、秀吉の四国征伐で香西氏滅亡の危機が迫った。伝承によれば、このとき家老が主家の財宝を山中に隠したが、それを運んだ下笠居村中山の百姓31名は、口封じのために殺されたという。山中に隠した財宝は、勝賀城落城にまつわる「黄金の釜」の伝承と関係があるかもしれない。



14 首切り地蔵(くびきりじょう)

香西山口から根香寺への参道(遍路道の入り口)大鳥居の下にある堂中地蔵の通称。この地蔵と植松備後守資正(びんごのかみすけまさ)にかかる伝承があり、そのことから「首切り地蔵」の名称がある。

15 童子が浜(どうじがはま)

胴七が浜。塩田(生島新浜)が造られる前の東生島の浜の異称。寛延年間(1750)に西讃一帯に広がった大い揆を指導した七人(通称七人童子、七義士)のなきながら、この浜で茶毘に付されたことから生まれた呼称であるという。現在、東生島墓地があるあたりが、かつて童子が浜であると伝わる。



1 崇徳天皇御遺詔地、千尋が嶽(せんじんがたけ)

根香寺から白峰寺へ200m余り進んだ遍路道の上に石碑があり、そこを東へ100mほどの所に青峰分校跡がある。(このあたりを千尋が嶽と呼ぶ)校舎の西側に崇徳上皇の祠がある。伝承によれば、生前の上皇は京都の方向が望める五色台東北の千尋が嶽に陵を置くことを希望したという。



大正初期頃の千尋が嶽からの写真



崇徳上皇の祠

2 下笠居小学校青峰分校(青峰版二十四の瞳)

満州からの引揚げ者など青峰国営開墾地入植者の子弟のために、昭和25年(1950)1月15日開校。昭和37年(1962)3月31日閉校。閉校時は児童数12名教師1名。1年~6年が1学級でともに学ぶ小さな分校であった。



昭和25年頃の写真

3 亀水(たるみ)小学校(亀水分校)

生島・亀水地区を校区として明治6年(1873)に開校した小学校。当初は亀水薬師庵(現在興願寺の庫裡)に開校。明治34年(1901)5月分校校舎を加茂神社に移転。昭和36年(1961)3月閉校。分校跡地に加茂会館が建つ。



昭和25年頃の写真

4 牛の鼻⇒憂しが鼻(うしがはな)

神在港の西隅に位置する小山状の岬。物憂(ものう)しが鼻、憂岬(うしみさき)、天神の鼻などともいう。延喜元年(901)、菅原道真公が太宰府左遷の途上立ち寄って船泊まりし、国司時代にゆかりのあった人々(秦久利、平雅俱、龍燈院住職空澄、香西浦漁師平賀某ら)との別れを惜しんだ場所だと伝わっており、そのことから憂しが鼻、物憂しが鼻という。



5 生島菅原神社と馬蹄石(ばていせき)

伝承によれば、太宰府に左遷される途中、神在に立ち寄った道真公がおんど峠を馬で越えて生島を訪れたという。生島番屋が浜には、道真の馬蹄石といわれる自然石があり、蹄(ひづめ)の跡が残っているという。生島菅原神社が祀られている。



神在(しんざい)の地名の由来

住吉川の downstream 河口一帯をさす地域名。元は海岸の水際の深いことから深際(しんざい)と称したという。さらに延喜元年(901)菅原道真が筑紫左遷の途上、船をこの海岸に泊めて両三日滞りしたと伝えられ、後に道真が神格化され天神となったことから、この地を神在と称したという。(香西記)

植松(うえまつ)の地名の由来

もとは中山とともに笠居郷奥村。地名が奥村から植松に変わった理由は不明。

中山(なかやま)の地名の由来

もと笠居郷奥村。勝賀山と根香(ねごろ)山の間の山地という意味か。

生島(いくしま)の地名の由来

地名の由来は、昔、早魃のとき、稲川出水、突抜泉(ツケンケ)などのこの地の名水で直島をはじめ近くの島を濁水から救ったことから付いた名であるという(香西記)。「島(島人・しまびと)を生かした土地」という意味か。また、水気のある場所を意味する「イク(生)」と関係する地名であるとする説もある。



稲川出水

亀水(たるみ)の地名の由来

「香西記」の解釈

青峰と黒峰の間の谷(フタジ)には亀ガ淵(浄ガ淵・ジョウガブチ)と呼ばれる深淵があり大亀が棲むと伝えられ、そこを源流として北流する川を亀の水と称して尊重され、亀水(たるみ)と呼んだ。

「高松地名史話」の解釈

都が干ばつするとき、阿利真という人が滝(垂水)の水を引いて孝徳天皇の御殿の飲料水を確保した功により、垂水公の姓を授けられた。その子孫が讃岐に移り住んだことから、その姓が地名になった。その後、源流地域であるフタジ山の亀の伝承と結びついて、垂水(たるみ)が亀水(たるみ)と表記されるようになった。

瀬戸内海国立公園

昭和9年(1934)3月16日に瀬戸内海、雲仙、霧島国立公園の3か所が日本最初の指定を受けた。瀬戸内海中でも多島海として地形を最もよく発露した備讃瀬戸を区域とした岡山、広島、香川の3県に跨って東は小豆島、西は鞆の浦に至る海面とこれに浮ぶ124の大小島と沿岸陸地の一部。当時の調査結果に、「岡山県では田ノ口西の王子ガ岳、香川県では高松と坂出との間にあたる大島嶼、この両者は相対峙して瀬戸内海を広角レンズに収めたるに適した雄大な展望地点であります。」とある。昭和43年(1968)には五色台が追加指定された。

